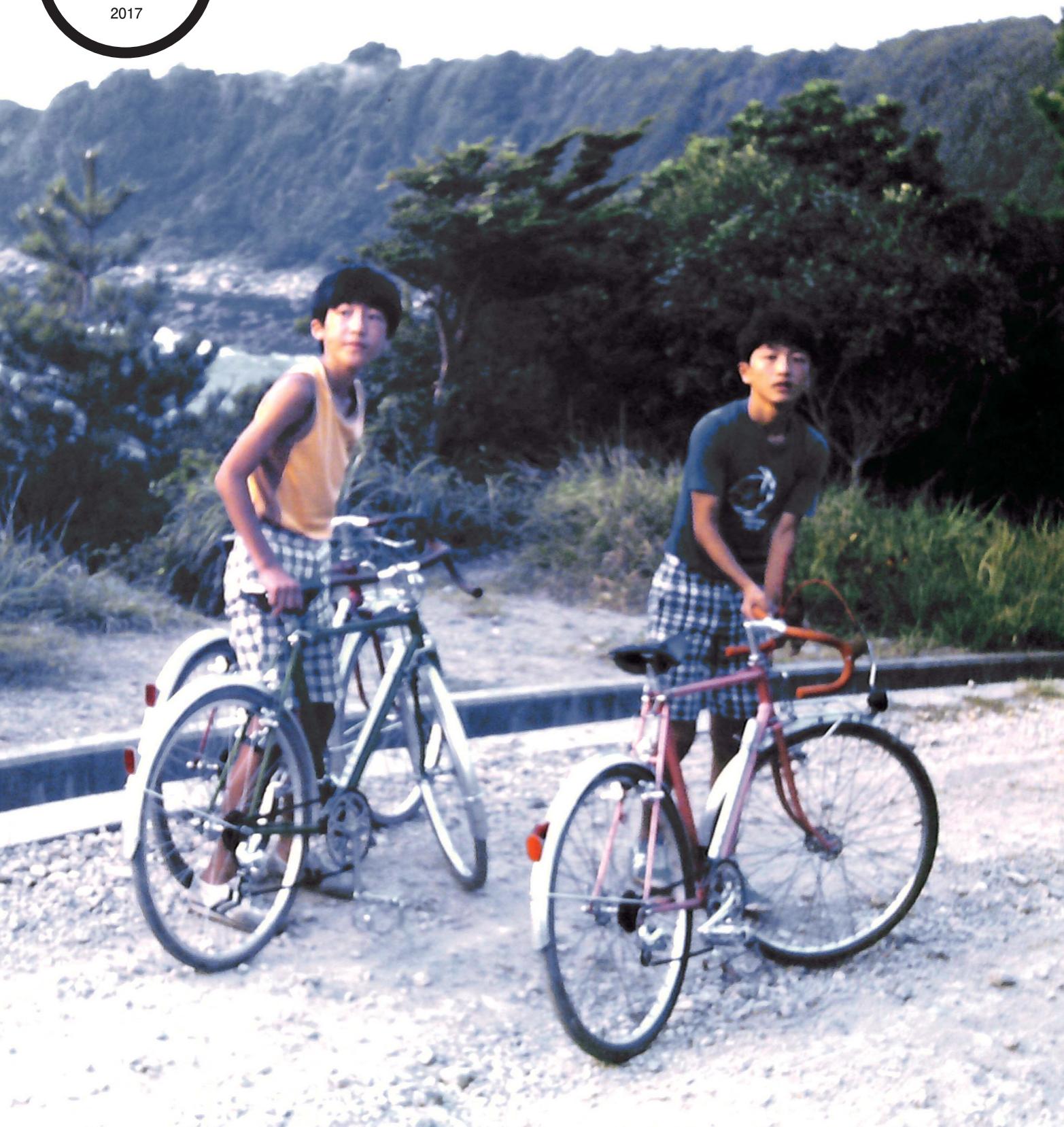


HANDS

Kokura Memorial Hospital

68

2017



坂口 元一からの
メッセージ動画配信中!!

いつもの暮らしに、いつものあなた
小倉記念病院

〒802-8555 北九州市小倉北区浅野3丁目2番1号 TEL.093-511-2000(代表) 小倉記念病院

TEL.093-511-2062(医療連携課) FAX.0120-020-027(医療連携課) FAX.093-511-2032(救急室)夜間・休日における救急患者の情報のみ

【表紙】心臓血管外科 主任部長 坂口 元一 (写真右)

2017年4月、新たに赴任してきた心臓血管外医 坂口元一。産婦人科医の父、祖父を持ち、幼い頃から医者の存在は身近にあった。やがて医大へ進み、将来を模索する中で、8時間をかけ命を救う現場に感銘を受け、心臓血管外科の道を歩んでいる。



坂口元

G enichi Sakaguchi

【経歴】
1992 京都大学卒業
1992 京都大学附属病院 心臓血管外科研修医
1994 大阪赤十字病院 心臓血管外科医員
1998 オースチン医療センター心臓外科 フェロー
2000 京都大学附属病院 心臓血管外科医員
2002 国立京都病院 心臓血管外科医員
2004 倉敷中央病院 心臓血管外科副医長
2005 倉敷中央病院 心臓血管外科医長
2008 倉敷中央病院 心臓血管外科部長
2013 静岡県立総合病院 心臓血管外科部長
2017 小倉記念病院 心臓血管外科主任部長

【Profile】
心臓血管外科 修練指導医
日本外科学会 指導医
胸部大動脈瘤ステントグラフト 指導医
腹部大動脈瘤ステントグラフト 指導医
日本胸部外科学会 認定医
日本冠疾患学会 評議員
日本血管外科学会
日本循環器学会
日本冠動脈外科学会
米国STS
欧州EACTS

15,500例を超える国内有数の症例数を有する施設として発展してきた。2008年には大動脈瘤に対するステントグラフト治療、2013年から重症大動脈弁狭窄症に対する経カテーテル大動脈弁置換術「TAVI」といった患者さんの負担が少ない治療も積極的に行っている。

そんな心臓血管外科を新たに率いる坂口元は「私たちとは最高水準の医療を安全に患者さんに提供できるように努力しつづけ、どんな重症症例であっても真摯に向き合い最善の治療を提供して参ります。」と抱負を語った。

今後も小倉記念病院 心臓血管外科は、時代に即した最先端の技術・手術手技を取り入れ、患者さんの負担を軽減し、安全で質の高い治療の提供を目指していく。

心臓血管外科 主任部長



どんな重症症例であつても
真摯に向き合い
最善の治療を提供する

2017年4月に心臓血管外科主任部長として赴任してきた坂口元は、京都大学卒業後に京都大学心臓血管外科、大阪赤十字病院心臓血管外科にて心臓外科の初期トレーニングを経験している。研修医の頃は、病院内で寝泊まりすることも多く、圧倒的な手術を行う指導医のプレッシャーは半端なものではなかつた。そんなハードな毎日を過ごしたこと、これが彼の基盤となつている。

その後、留学したオーストラリアにあるメルボルン大学オースチンメディカルセンターでは、冠動脈バイパス術のバイオニアである Prof. Brian Buxtonのもとで臨床トレーニングを2年間行つた。帰国後は京都での研究生活の後に倉敷中央病院で9年間、静岡県立病院で4年間、診療の最前线に立ち続けている。

当院の心臓血管外科は、1973年の開設以来、総開心術症例は2017年1月に

歩んだ道のり



大学時代

バリバリの体育会系スキー部に所属。年間100日間は山にいましたよ。アルペンやってましたけど、1年生の年末合宿で、スキー板に塗るワックスを全身に塗られて、除夜の鐘を聞きながら洗い流していたを思い出しますねえ。大学6年のポリクリで見た心臓手術がカッコ良くてこの道を目指しましたけど、手術をしていたのが伴先生ですよ。親父が天理よろず相談所病院時代と一緒に働いていたから、僕が小さい時を知っていて、「お前の親父はハコスカ乗ってたな」ばっかり言っていました(笑)



幼少期

僕は4人兄弟で上から2番目。父親の勤務の関係で天理よろず相談所病院の官舎に住んでいて、野球が有名な地域だけど、30対0で負けるような弱小の少年野球チームに入りましたね。



研修医時代

地獄の日々でした。月20日以上は泊まり込んでいましたね。当直していると決まって22時に部長から電話がかかってくるんですけど、みんな「どやコール」と呼んでました。「どや?」って聞いてくるんで(笑)。22時になら僕らも看護婦さんもICUの電話の前で経過表を持って待機してましたよ。レントゲンもデジタルじゃないから毎日6時から暗室行って、フィルムをカセットにセットして、現像して、それを毎朝回診までに終わらせるという時代でしたけど、本当に大変でしたねえ(涙)。

小・中・高時代

サイクリング少年でした。小6に淡路島1周、中3で博多～鹿児島を走破、高1で奈良～東京を走破。高校では音楽にも目覚めメビメタバンドを結成。僕たちの学園祭のコンサートに女子高生が見に来ましたよ。





世界トップクラスの病院へ留学

1992年に大学を卒業後、大学病院や市中病院でトレーニングをして、1998年1月から2000年5月までメルボルン大学のオースチンメディカルセンターに留学しました。最初の1年はリサーチラボに在籍し、そこでラットを使った左室形成の研究を行い、JTCVSに論文を1編書いてクリニカルのポストを待ち、1999年1月からCABGで有名なProf. Brian Buxtonの下でクリニカルフェローとして臨床のトレーニングをしました。

オースチンメディカルセンターは公立病院で年間700例程度の開心術(7割くらいがCABG)があり、道路をわかった向かいにも大きな私立病院があるので、そこでも週に1度ほど上級医師のプライベート患者への手術を手伝いました。

その当時は、朝7時頃に病院へ行ってICUラウンド、カンファレンスをして昼間は2例ほど手術に入る毎日で、術後管理はICUドクターが担当し、病棟はレジデントがカバーしてくれました。オシコールデューティー(緊急や病棟レジデントでは対処できない場合にコールされる)は週に一度ほど回ってきますが、あまりストレスなく、勤務できただと思います。

メルボルンは住むには非常に快適な都市で、本当に楽しく充実した2年間を過ごすことが出来ました。

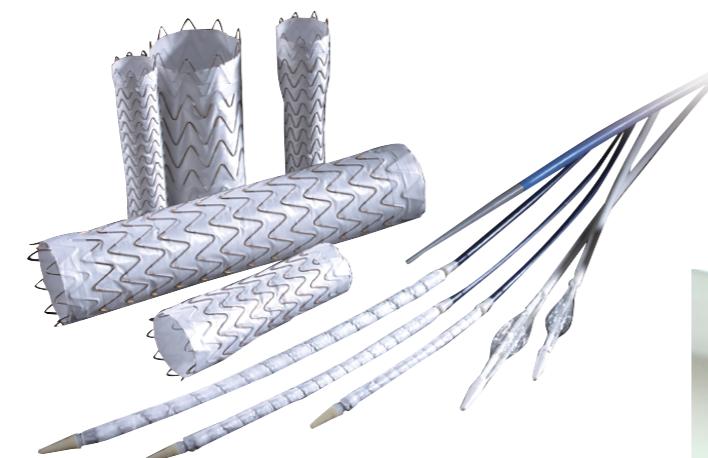
**メルボルン大学
オースチンメディカルセンター**

1853年に設立のメルボルン大学は、オーストラリア連邦ビクトリア州メルボルンに所在する州立総合大学。世界大学ランキングで常に優秀な大学として評価される世界有数の名門大学である。心臓外科・心臓血管外科の領域で、欧米に比肩する実力を持ち、心臓外科分野で世界をリードしている。

ステントグラフト

動脈瘤に対する最新の低侵襲治療

ステントグラフトによる治療は、腹部では大きく切開することなく、また、胸部では肋骨を切らずに、体外循環（人工心肺）を使用せず治療できます。所要時間も短く、身体にかかる負担が少ないのが特徴です。ステントグラフトは、人工血管にステントといわれるバネ状の金属を取り付けた新型の人工血管で、これを圧縮して細いカテーテルの中に収納して使用します。脚の付け根を4~5cm切開して動脈内にカテーテルを挿入し、動脈瘤のある部位まで運んだところで収納したステントグラフトを放出します。放出されたステントグラフトは、金属バネの力と血圧により広がって血管内壁に張り付けられるので、外科手術のように直接縫いつけてなくても自然に固定されます。大動脈瘤は切除されず残りますが、瘤はステントグラフトにより蓋をされることで血流が無くなり、次第に小さくなる傾向がみられます。また、たとえ瘤が縮小しなくとも、拡大を防止することで破裂の危険性がなくなります。



治療実績 101 件

(2016年実績)

胸部:39件 腹部:62件



治療実績 364 件

(2017.7.18現在)

TA(経心尖アプローチ):78件

TF(経大腿アプローチ):286件

TAVI

大動脈弁狭窄症に対する治療

心臓外科手術が困難な大動脈弁狭窄症に対する新しい治療方法です。カテーテルという管を用いた新しい大動脈弁の治療方法で、心臓外科手術に比べて体の負担が少ないというのが特長です。現在、欧米では経皮の大動脈弁植込み術(TAVI)が施行されおり良好な成績が得られています。当院では4年前からこの治療を行っています。自覚症状が出現して手術療法が必要となった患者さんにおいて、高齢である場合、既往に心臓の開心手術を施行している場合、あるいは心不全の状態が悪く、手術の危険性が利益を上回る場合、さらに手術への体力が落ちてしまつてお手術には耐えられないと判断された患者さんのための治療法です。

心臓血管外科の最前線

心臓血管外科手術の新たなスタンダードになりつつある、

「大動脈瘤に対するステントグラフト内挿術」・「大動脈弁狭窄症に対するTAVI」坂口は、胸部大動脈瘤ステントグラフト指導医・腹部大動脈瘤ステントグラフト指導医の資格を有し、TAVIにおいては当院がTAVI第一症例目を行う際に、指導医として来院した経験を持っている。





ヒルクライムレース

一人の心臓血管外科医からチームを牽引するリーダーとしての役割を担うようになつてきた時、トライアスロンやヒルクライムレース、トレイルランなど最も過酷と言われるような競技を始めた。

それは同僚からの一言がきっかけだった。「リーダーは常に、ポジティブだ。」

鉄人レースとも呼ばれる競技は苦難の道だ。しかし、必ずゴールはある。自分の目指す道と重なる瞬間だった。

競技中、「やめよう」と言つている自分と「続けるんだ」と言

う自分が頭の中で何度も戦う。でも、「続けること」こそがゴールへたどり着く唯一の方法。こういう経験を繰り返すうちに自分の気持ちをコントロールして「どうすればできるのか?」とポジティブに考えることがだんだんと身についてくる。トレーニングも、レース本番も、自分との対話が大切だ。痛みは出でていないか、まだいけそうか、苦しさを理由にごまかしたり、自分にうそをついていないか。忙しい時間の中で、こんなに自分と向き合うことはあるだろうか?この時間こそが自分自身を成長させる

リーダーは、常にポジティブだ。

ことへと繋がっていた。

またトライアスロンはタイムを争うだけの競技ではない。完走者全員が勝者であり、すべてのフィニッシャーが拍手で迎えられる。もしかしたら、一番速くゴールした選手より、制限時間内いっぱい使ってギリギリにゴールしてきた人のほうが、拍手は大きいかもしれない。みんな昨日までの自分に負けないように、自分自身と戦っている。年齢を言

い訳にしない、自分自身に負けない心を鍛え直すことができるスポーツだった。

辛さや苦しさを味わおうとしない人間に本当の楽しきは理解できない。かけた苦労が大きければ大きいほど、それに比例して感動も大きくなる。

坂口は、このアスリートの精神を胸に、小倉記念病院というスタートラインに立った。



トレイルラン(平尾台にて)



シーガイアトライアスロン